



(第2稿)

ミクロネシア！

若さの名残りを追って

徳原徳子

第1章 はるばるやって来ました

DC4という古ぼけたプロペラ機の騒音にようやく馴れ、藍一色の変化のない海を見下ろすのにも飽きた頃、はるかかなたに小さな島が見えました。まだ、けし粒のように小さな点でしたが、これがこれから数年間続くであろう私の人生を預けることになるマーシャル諸島マジュロ島だと思えば、いたたまれない気持ちになりました。近づくとつれ、期待や不安、そのほかさまざまに入り混じった思いで、心臓の鼓動が高まりました。

マジュロは、リボンを不規則な輪にして、そっと置いたような小さな環礁です。DC4はやがて島の上空に接近しました。藍色だった海がやがてグリーンに、そして明るいブルーに変わり、島の周囲が白い波で縁取られている光景がはっきりと見えてきました。この世のものとは思われない美しさなどという表現はあまりにもありふれています。夢にさえ見たこともないような夢の島での生活がこの島にあるはずです。

滑走路の両側には、島中の住民が集まったかと思われるほどの大勢の人たちがこちらを見上げていました。着陸すると子供たちは歓声を上げました。コンクリートのフロアに、屋根を支える4本の柱だけといった粗末なターミナルの建物には、現地の政府担当官や、米国人役人、その夫人たちが出迎えの中にいました。入国査証の検査など何もなく、旅客たちはそれぞれ迎えに来た人たちと立ち去る用意をしていました。

私を迎えに来た人があるはずだと思い、しばらくあたりを見回していました。現地人や米国人ばかりの旅客の中に、たった一人若い日本人女性がいたことは奇異に映ったのでしょうか。米人女性が私に近づき、政府の役人の妻だと自己紹介し、私に来意を問いました。当然私を出迎えてくれる人があると思っていたのに、誰一人私の到着を知らなかったのかと不安になりました。私はその夫人にすがりたい気持ちになり、MIECOと略称されるマーシャル・アイランズ・インポート・エクスポート社の社長で、マーシャル諸島の大酋長であるアマタ・カブアの会社で働くために来たのだと説明しました。

誰かが急ぎょオフィスに走り、(この島に電話はないのですから)間もなく会社のマネージャー、チャーリー・ミューラーがやってきました。生憎、アマタは他島を訪問中なので、ラジオで連絡したということです。取り敢えずホテルに落ち着くようにと、チャーリーはピックアップ・トラックで荷物とともに私をホテルに案内してくれました。

ホテルなどと呼ぶには恥ずかしくなるようなバラックで、8畳ほどの部屋が薄い板壁で仕切られているだけでした。室内はベッドと椅子だけ。鍵もなく、内側から掛けられる小さなフックが取り付けられていました。シャワーも便所も共同です。「取り敢えず」といって案内されたこのホテルの部屋が、私のマジュロでの住居となりました。

一休みしたあと、チャーリーが迎えに来て、少し離れたオフィスに行きました。小さいとはいえ、一応コンクリート二階建て、この島最大のビルです。アマタからラジオの連絡があり、宿舎と食事を与えるようにという指示があったということで、私はほっとしました。

ギャレーと呼ばれている、工事現場の飯場のようなホテルの食堂で最初の夕食をとりましたが、ここは米国人の役人や学校教師などが利用する、いわば高級ダイニングルームです。料理人はジョーというフィリピン人で、結構おいしい料理でした。

1960年代、日本はまだ貧しく、外食は贅沢なものでした。ギャレーでの食事は、だから私にとってはハイソサエティーの仲間入りをしたような晴れがましいものでした。こうして、私の南の島での生活は、1965年6月16日から始まりました。幸運な出だしといえます。

市橋加世さん、今、私はあなたに宛てて長い長い手紙を書き始めましたが、しかしこれは、あなたに宛てたものというより、むしろ、私が自身に語りかけた思ひ出話しの独り言といったほうがいいかもしれません。

あなたと私は東京・丸の内の、いわゆる外人商社で働いていた仲間で、給料日には食事をしたり、デパートで買い物をしたり、温泉旅行も何度かしましたね。私は社長秘書、あなたは経理を担当していました。よく、将来を語り合いましたが、4年勤務したあと、あなたは結婚して、会社をあっさりと辞めてしまいました。次に会った時、あなたは妊娠中、そして次には男の赤ちゃんを抱いて、夫や子供の自慢をしていました。

「結婚っていいものよ。平凡だけどとてもしあわせ」と言って、私にも早く結婚するようすすめてくれました。

「そうね」とは言いましたが、私はあなたみたいにはなりたくない、そんな平凡なしあわせ、私は望んでいないと心の中で反発していました。結婚相手が見つからない負け惜しみかもしれません。しかし、結婚よりもっと大きな、はるかに素晴らしい何かがあるはずだ、私はそれを求めているのだと信じていました。

米国人が社長の、個人経営貿易会社で働いていた私は、通常の日本企業で働く女性に比較して、かなりの高給をとっていましたが、日本の女性にとっては男性社会の日本より、海外に出た方がよい生活が出来るという信念を持ち続け、ずいぶん前から外国行きのチャンスをねらっていました。良い生活というのは金銭的なものだけではなく、社会的地位や社会通念、女性に対する処遇といった、あらゆることで豊かなものではないかと憧れていました。若さゆえの夢も無論ありました。

当時、「外国」というのは「米国」と同義語で、誰もが米国行きに憧れていました。私も同様でしたが、コネがなく、苛立っていました。

或る夏の日曜日の午後、或る船会社が船上パーティーを開き、輸出入会社の従業員が招待されました。そこで、昔、同じ会社で働いていた小阪博康さんと再会したのです。彼が、パートナーと共同で小さな貿易会社を立ち上げ、ミクロネシアの島々と取引きをしていることを知りました。彼に頼んだらチャンスはあるかもしれないと思い、どこかの島の会社に就職したいと斡旋を懇願しました。はじめは気まぐれと思われ、相手にされませんでした。私の熱意のこもった執拗さに負け、まじめに考えてくれるようになり、取引先の社長に手紙を書いてくださいました。それがアマタです。私も「外地に出て、自分の可能性を試してみたい」などと、なまいきな手紙をアマタに宛てて書きました。

間もなく、当時マネージャーをしていたボブ仁井というハワイ出身の日系二世から手紙を受け取りました。内容は「歓迎する。アマタが必要書類の手配をしているので、いずれ手もとに届くでしょう」というものでした。誰もが憧れる米国行きより、誰も行ったことのないミクロネシアに就職できたことで、私の夢は大きくふくらみました。

外国行き、特に外国で働くことはきびしく規制されていた時代、親切な人たちに助けられ、このように簡単に夢が実現するとは思いがけない幸運でした。私が

友人たちに外国へ行くと話すと、アメリカかと訊かれました。そうではない、南洋群島の小さな島だと答えると、なんだと、落胆したような、軽蔑したような目で見られました。それほど日本人の米国崇拜が強力な時代だったのです。

羽田空港を発つ時、母や弟たち、会社の同僚、それに坊やの手をひいた、うすいブルーの和服姿のあなたが見送ってくださいました。飛行機が離陸し、次第に小さくなってゆく見送りの人たちを見たとき、涙が出そうになり、鼻がツーンとしてきました。

先ずマニラに1泊、グアムに2泊、そして米軍ミサイル発射基地となっているマーシャル諸島のケゼリン島に1泊しました。ケゼリンでは、軍人の宿舎のような、2段ベッドが3台並ぶ大きな部屋に私一人が宿泊しました。ひっそり、がらんとした部屋のベッドに横たわった時、果たしてこれでよかったのだろうか、大変な間違いだったのではないだろうかなどと考え、心細さに襲われ、初めて涙を流しました。

翌日ようやくマジロに到着しました。日本を発つにあたり、色々な人が色々なアドバイスをしてくれました。いわく、南の島々は暑いけれど、空気がからりとしているのでしのぎやすい。いわく、暑さのため体の消耗がはげしく、夏痩せするでしょうから、服は小さめのものを持参するよう。いわく、女性一人で野蛮な島へ行くのは危険。酋長の愛人になれと言われてたらどうしますか・・・などと。蛮地に一人乗り込む冒険家とでも思ったのでしょうか。皆が私の身を真剣に心配していました。私はこれらのアドバイスを真摯に拝聴しました。

しかし、現実を彼らは何も知らなかったのです。アマタは社長であると同時に大酋長として強い権力を持っていました。鶴の一声で島民は島を追放されるほどの、想像をこえる権力です。彼のリーダーシップは島の人たちに信頼され、うやまわれ、尊敬されていました。アマタは私には非常に親切でした。日本語も英語も達者で、アイロンのきいたアロハシャツを常にきちんと着ている紳士でした。美しい夫人と一男二女の父親でもあり、愛人を強要されることなど杞憂に終わりました。

食・住つきで得た職ですから不満のあろうはずはありません。ギャレーでの3度の食事は米人好みのメニューで、食べ放題。日本で貧しい食事に甘んじていた反動でよく食べました。わずかな間にすっかり皮下脂肪が豊かになり、アドバイ

スに従って小さめに作った服は着られなくなり、新しいものを大量に買いました。

暑さはきびしいものです。特に6月から8月頃までは雨が多く、殆ど無風状態。はげしいシャワーのあと、かっと照りつける太陽の熱気は、さながらオーブンで焼かれるようです。そして日陰に入っても湯気に当てられているような不快さです。空気がからっとしているのも、日陰に入ればしのぎやすい・・・などと大変なウソを吹き込まれたわけです。

日本で私は高給をとっていたとはいえ、当時の円・ドル換算率では、せいぜい100ドルほどでした。あの頃1ドルは360円だったのですから。マジュロでは食・住つきで1ヵ月300ドルを支給して下さったので、私は突然リッチになりました。服装も、食事も、気分も、そして懐も！

こんな風にはるばるやって来た絶海の孤島での生活は実に快適な環境で始まりました。

第2章 ピクニックとパーティーの島

戦前・戦中を通じ、日本の委任統治領であった南洋群島では、現地人の殆どは日本語教育を受けました。したがって日本語が達者です。しかも、ハワイの日系二世や三世のような方言だらけ、訛りだらけの日本語ではなく、文章に書いたような正しい丁寧な日本語を話しました。日本政府の教育がいかに徹底していたかをうかがわせます。

戦後は国連の信託統治領として米国が統治するようになり、サイパンに高等弁務官を置き、各群島に地区行政政府がありました。マジュロの地区行政官はダニー秋本というハワイの日系二世で、ハワイ訛りの日本語を話す柔和な性格の男性でした。いつもにこにこしているダニーは、私と日本語で話すのが楽しいらしく、私も田舎のおじいちゃんと会話するような懐かしさを感じていました。

アルバッタは日本語教育を受けた現地人のひとりで、艶のある黒い皮膚を持つ逞しい壮年です。大きな目玉をぎょろぎょろさせたひょうきん者で、私と同じオフィスで小売部の商品記録係りをやっていました。しかし計算は苦手で、ひと桁の計算でもいちいち電算機を使う始末です。彼ばかりでなく、島の人たちの計算

のおそいには驚きました。私は持参したそろばんで彼らの計算を助けて喜ばれました。

アルバッタは私の入社した当初から何くれとなく小まめに面倒をみてくれた人で、おかげで異郷に暮らす不便さを感じないですみました。

働き始めて1ヵ月ほど経った或る日曜日の朝、アルバッタはひょっこりとホテルにやってきて、これからビーチへピクニックに行きましょうと誘ってくれました。窓から外を見ると、彼のピックアップ・トラックの荷台に、鍋や釜、ゴザなどが5人の子供たちと共に満載されていました。中の座席にはよく肥えた夫人がどっしりと鎮座し、こちらを見て笑っていました。私はすぐに水着とタオルを持って、座席に夫人と並びました。

オフィスは土・日曜日は休みで、私は一人で近くのビーチを散歩したり、ホテルの部屋で所在なくすごしていました。といっても退屈というわけではなく、何ごとにも悩まされず、わずらわされず、静かに、何もしない「ひま」をエンジョイしていました。寂しくもなかったのです。日本では全く味わえなかった平和な気分でした。アルバッタは多分、私が一人で寂しいのではないかと、私のためにピクニックを思いついたのでしょう。

走っても走っても道路の両側は椰子の林。規則正しく、整然と植えられています。これは、日本統治時代の計画的な植樹だったということです。どれほどの椰子を植え、そこからどれほどのコプラが採取出来るか、そしてその経済効果までも十分に計算したものであることを何かの書物で読んだことがあります。

その林のむこうは海。どういう目印しがあるのか、或る箇所ではひょいと曲がり、ビーチに出ました。環礁の内側の海はいつもおだやかで、澄みきった明るいブルーのかなたはかすんで見えます。椰子の木かげにトラックを止め、子供たちと荷物を下ろし、夫人は料理にとりかかりました。乾いた小枝を拾って来て火をつけ、その中に手ごろな小石を投げ入れ、先ず小石を熱くします。小枝が燃え尽きた頃、鍋に用意した醤油漬のチキンをその熱い小石の上に載せ、焼きあがる合間に椰子の葉を切り取って手早く編み、食事用の器(うつわ)を人数分だけ作りました。椰子の葉を洗わず、その器に食べ物を盛る？不潔ではないのです。毎日のシャワーですべてが洗い流され、さらに強い太陽が消毒してくれますから。

釜に用意してあるご飯や、パンの実を粉にして揚げたドーナツ、そして焼けたチキンを器から手づかみで食べました。ご飯は3本の指を使ってすくい上げると

いう食べ方を私はすぐに覚えました。飲み物は椰子の実のジュース。「のどを鳴らして」の言葉通り、音を立てて飲み干しました。

さて、子供たちと泳ぎに行こうということになり、私は繁みに入って水着に着換え、彼らが着換えるのを待っていましたが、そんな様子もなく、私の水着姿を珍しそうに眺めているだけでした。私が水ぎわに歩いて行くと、子供たちもぞろぞろとついて来て泳ぎ始めました。実はここでは水着など必要ないのです。島の人たちはぬれることは気にせず、着のみ着のまま泳ぎ、そのままの服装ですごし、雨が降っても傘もささず、濡れねずみで歩きます。強い太陽がやがて乾かしてくれるという、自然には逆らわない習慣のようです。

泳いだのは子供たちと私だけで、アルバツタ夫妻は食後、椰子の木の下で仲良く昼寝を楽しんでいました。日本の都会周辺ではすでに見られなくなった、果てしなく明るく澄んだ空と海。波をかぶる度にリーフの上に倒れ、大騒ぎしました。

ほかに誰もいない、プライベート・ビーチ。こんな贅沢、日本ではとても望めません。

アルバツタ夫人はその頃妊娠中でした。間もなく女の子を出産し、夫妻の希望で、私と同じ「徳子」と名付けました。私のように大きな希望を抱いた冒険ヤローに育ってほしいと私は祈りました。

ヤモリを英語でゲッコといいます。部屋の壁や天井に張り付いて「キッキッ」と鳴き、時に排泄物を落とします。はじめの頃、ふっと天井を見上げると、大きなヤモリが張り付き、私を見下ろしているようで気味悪かったのですが、やがてそれにも慣れ、鳴き声もむしろ可愛らしく感じるようになりました。ヤモリは虫などを食べてくれる有益な爬虫類ということです。私は一人住まいではなく、ヤモリと同居しているような気分になりました。

ヤモリとの同居にも慣れ、半年経ちました。クリスマスが近づき、島のムードが華やかになりました。クリスマスの集会での歌は、自分たちの作詞・作曲です。11月はじめ頃から毎日、夕方になると島の人たちは集会所で歌の練習を続けます。楽譜は数字で表したもので、私は子供の頃に習ったハーモニカの楽譜を思い出しました。彼らの歌は、節回しも発声法も独特なもので、なんとなく哀愁がただよい、郷愁を誘うものです。

彼らの殆どはキリスト教信者で、島にはカトリックとプロテスタントの教会が1カ所づつあります。私はキリスト教信者ではありませんが、ホテルの近くにあるカトリック教会に時折遊びに行き、米国人の神父や尼僧たちと仲良くなりました。この教会には小学校があり、英語教育をしていました。米国人の子供や、島のいわゆるエリート家庭の子供たちが通学していました。私は日本から持って来た童謡のレコードをかけ、勝手な振り付けをして、学校で子供たちに踊りを教えました。

島の女性たちは、冠婚葬祭にお揃いの服を着ます。これは習慣というより、彼女たちのおしゃれ、そして一種のファッション・ショーかもしれません。日本製の生地をまとめて買い入れ、型紙もなく、大胆に裁断し、日本製の古い手動ミシンで縫い上げます。スタイルは半袖、衿なし、ウエストで切り換え、スカートの部分はギャザーを充分にとったものです。これは、しゃがんだり、あぐらをかいたりする時に、とっぷりとカバー出来る便利さがあります。

ついでながら、彼女らの排泄はビーチでやるようです。朝早くビーチを散歩すると、水ぎわにしゃがみ、スカートでカバーし、海の彼方をじっと眺めている女性をあちこちで見かけます。まるで世を達観した仙人のようなきびしい表情でしたが、近寄ったとき、じろりとにらまれました。あれが排泄のスタイルだと後になって知りました。潮が満ちれば汚物は沖へ流されます。天然の水洗便所だったので。服の十分なギャザーは、排泄の際にも必要だったもののようです。

クリスマス当日、教会やビーチなどでパーティーが開かれます。島中の人が出かけ、歌い、踊り、食べ、一日中楽しめます。私もカトリック教会のパーティーに招待され、子供たちの踊りの練習の成果を見とどけました。

この島では、ピクニックやパーティーを催すことが多く、私はたった一人の日本人女性ということで、すっかり島の有名人になり、招待されることが日を追って多くなりました。

新しい人が来たといったらパーティー、去る人のために盛大なピクニック、子供の誕生祝いのパーティーなど。土・日曜日はあちこちのビーチで必ず幾組かのピクニックが見かけられました。

アルバッタも、徳子ちゃんの1歳の誕生日に大きなパーティーを開きました。パーティーの準備はその数日前から始められます。椰子の葉を切り落とし、沢山の器を編んだり、パンの実や、豚を丸ごと蒸し焼きにするための穴を掘ったり、

その豚を包むバナナの葉を切り取って集めたりなど、アルバッタと子供たちは大忙しでした。

自宅で放し飼いにしている豚のうち1頭を殺すことになり、彼の庭先でその様子を見物しました。まず、目指した豚に、小石を投げつけ、昏倒させるのですが、その狙いの正確なこと…2発目は豚の眉間に当たり、簡単にダウンしました。これをコプラの袋に入れ、鳴き叫び、暴れている豚をかついでビーチに運び、息の根を止め、毛を焼き、腹を裂き、内臓を取り除くという順序です。私はこうした残酷な場面に立ち会うのは遠慮しました。

簡単な暗算も出来ず、普段はあまり賢明そうに見えないアルバッタが、たった一人でこれだけの大仕事を手早く終らせるその熟練ぶりに私は驚嘆しました。石を投げる時、逃げ回る豚を追う時の敏捷さ。大きな目玉をさらに大きく見開くその真剣さに、私は真剣勝負に命を賭けるサムライの表情を見ました。

豚の、裂いた腹の中に、よく熱した石をいっぱい詰めて、それを抱かせるように四肢を縛り、バナナの葉で覆い、パンの実と一緒に、熱した砂を入れた穴に埋め、更に火を絶やさず、一昼夜蒸し焼きにするのです。

パーティーは夕方、陽が沈んでから始まります。焼いた豚は小さく刻まれ、大皿に盛られました。パンの実は焼きいものようにホクホクになりました。そのほか、ポテトサラダ、チキン、日本からのたくあん、ベーカリーから特別注文で取り寄せたロール。私はおにぎりを作る手伝いをしました。大きな釜で何回も炊いたご飯で、何百個作ったか、数えるひまもありませんでした。

第3章 結婚・出産・葬儀

地区行政官のダニー秋本が、同じオフィスで秘書をつとめるグアム出身のエブリナと結婚することになりました。初めから結婚を目的に彼女をマジュロに呼び寄せたものでした。

ダニーの母親や弟もハワイからかけつけ、結婚式はダニーの官舎で、カトリック教会のハッカー神父司式のもとに行われ、盛大なパーティーが開かれました。この祝宴は3日3晩続きました。島の中心の広場に設けられたステージで代る代るお祝いの歌や踊りがくりひろげられました。私が子供たちに教えた踊りも無論、披露され、喝采を浴びました。

ダニーもエブリナも、このノンストップのパーティーにはさすがに疲れたようで、その後数日間、オフィスに姿を見せませんでした。

エブリナは結婚後わずか2ヵ月で男の子ビンセントを出産しました。彼女のウェディングドレスの腹のあたりを、多すぎるほどのギャザーでかくしていたのはそのせいかと納得しました。

ダニーの親バカぶりは見るに耐えないものでした。エブリナはやがて二人目の子供を妊娠したと聞きました。しかし出産前に他の島に転勤になりました。

我が社と競争相手の貿易商社が一家あります。そこに井沢菊治という、ハワイの日系二世が新しいマネージャーとして着任しました。戦後、除隊したあと、大阪の女性と結婚し、離婚するまでの数年間、日本に住んでいたということで、ハワイの日系人にしてはかなり正しい日本語を話しました。宿舎が決まるまで、しばらくホテルに滞在していたので、私とは毎日話しをする機会がありました。しかし離婚の際のにがい経験のせい、日本人女性を嫌っている様子が言葉の端々にうかがえたので、私は井沢さんとの会話にはある程度距離を置いていました。

住居が決まり、井沢さんは新しく出来た現地人のガールフレンドと結婚しました。着任して間もない、早ばやとした再婚で私たちは驚きました。ダニーの派手な結婚式とは対照的に、ひっそりと、誰も招待されず、祝宴もなかったようです。

島の人たちは井沢さんだけは「さん」づけで呼んでいました。非常に活動的な働き者で、オフィスや倉庫の整頓、小売店の中や周辺の掃除まで、どなりながらきびしく監督している姿をよく見かけました。

日本からの船が入港した時は島中は大騒ぎです。輸入貨物の荷揚げ作業は島で最も重要な仕事のひとつです。井沢さんは終日、書類を手にして船とオフィスと倉庫の間を、ピックアップ・トラックで往復し、従業員に指図をしていました。こうした井沢さんの仕事に対する真剣な態度は誰からも好かれ、島の人気者になりました。

何回目か、日本からの船が着き、荷揚げ作業を終えたあと、井沢さんは過労のためか体調を崩し、病院で手当を受けましたが、ペニシリン・ショックで急死し、私たちは啞然としました。

しめやかに社葬がとり行われたあと、島の墓地に埋葬されましたが、墓標に貼られた井沢さんの写真は微笑していました。

島の輪の内側は美しい、穏やかな海で、ピクニックや海水浴には絶好の場所ですが、輪の外側は常に太平洋の荒波がぶつかり、海鳴りが休みなく耳を襲います。私のホテルは外海に面していました。

私は横浜の東横線沿線に住んでいたのですが、「ゴーッ」という一番電車の走る音を夢の中で聞き、また今日も満員電車にもまれ、東京へ通勤するのだと気が重くなったものでした。それはついこの間までのことでした。ホテルの部屋で聞く海鳴りは、あの電車の音そっくりで、まだ横浜にいる錯覚に陥ったことも何度かありました。

井沢さん死去の知らせを受けた夜も、同じ海鳴りが耳を襲いました。短いマジュロ滞在、電撃結婚、そして急死。なぜこんなに死を急いだのか。井沢さんは私の目の前を嵐のように吹き抜けて行った人でした。井沢さんがとてもいとおしくなりました。

約10年後、その頃グアムに住んでいたダニーが心臓発作で急死しました。葬儀はハワイでとり行われましたが、すでにハワイに移っていた私はその葬儀に参列しました。エブリナは久しぶりに私を見て驚き、感謝し、そして悲しみをつのらせたようです。立派に成長したビンセントが妹の手をとり、まるで騎士が女王を警護するように、挨拶に動き回る母親の後にぴたりと付き添っている姿が印象的でした。

ダニーの結婚式と葬儀・・・奇しくも私はその両方を見届けたのでした。

ミクロネシアの人たちは平均寿命が短く、子供、特に嬰兒の死亡率が高いことで憂慮されています。医療、衛生、食習慣など、多くの問題があり、政府はその改善に取り組んでいます。島を歩くと、子供の多いのに驚きますが、乳幼児の葬儀の多いのにも驚きました。

ギャレーでウエイトレスをしていたトシコの孫娘が生後8ヵ月で死亡し、その通夜が彼女の家で営まれました。孫といっても、島の女性たちはティーンエージで子供を産み、その子供がまたティーンエージで出産するので、30代のおばあちゃんは珍しくないのです。トシコは36歳でした。

幼児の遺体は部屋の中央あたりの台に横たえられ、顔だけを残してシーツで覆われていましたが、まるで眠っているように可愛らしく、哀れさがつりました。トシコたち家族が交代で、切り取った椰子の葉をうちわ代りに、遺体の顔のあたりを飛び交う蠅を追っていました。

日本でいえば香典でしょうか、弔問に訪れた島の人たちは石けん、魚の缶詰、小さな玩具、袋入りの菓子などを遺体の周囲に置いて去りました。私は何も持たなかったもので、わずかながら現金を置きました。

ひつぎを作るカーペンターはいつも多忙です。木工所で作業の音が聞こえると、また誰かが死んだ、子供だろうかと心が痛みました。そして、この小さな島の墓地が、いつの日かいっぱいになるかもしれないなどと思ったものです。

幼児が1歳まで育てば生きのびるチャンスがあると喜ばれ、1歳の誕生日を盛大に祝う習慣があります。だからこそアルバッタは1歳になった徳子ちゃんの誕生日をあのように大がかりに祝ったのです。

第4章 船…フィジーへの旅

私の働くMIECOには500トン級の貨物船が2隻ありました。日本から中古の船を買い入れたもので「MIECOクイーン」と「ラリク・ラタク」と名づけられています。ラリク・ラタクとは西・東という意味だということです。

最大の企業であるだけに、輸出入のほか、卸・小売り、私の宿舎となっているホテル、レストラン、バー、映画館などすべてMIECOの経営です。映画館は周囲を板で囲っただけの野天で、夜だけ日本や米国の古いフィルムを上映していました。

2隻の船は交互に島々を回ります。マーシャル諸島には23の環礁があります。日本や米国から輸入した食料品や日用品をマジュロで下ろしたあと、MIECOの船に積み替えられ、客も乗せ、各島に運びます。代りにコプラを積み込み、マジュロに戻り倉庫に収めます。これをフィールド・トリップと呼んでいます。コプラは日本に輸出され、石けんなどの原料になります。コプラをご存知ですよね、加代さん。完熟した椰子の実から取り出した果実を半分に割り、これをいぶして乾燥させたものがコプラ、つまり椰子の実の燻製です。

ノーマイという中年のビジネスウーマンと親しくなりました。夫は政府で働く鉛管工で、やせて背の高い静かな人物ですが、ノーマイはよく肥え、二重あごで、日本語、英語、マーシャル語を取り混ぜ、よくしゃべりました。小さな小売店のオーナーで、MIECO、そのほかの会社から商品を仕入れ、なかなか繁盛しているようでした。

ノーマイは私の足を見て、「あんた、いい足している」と感心していました。私の足は日本人標準の大根足で、気にしていました。マーシャルの女性たちは正座するなど、足を圧迫することがないので、体の太さの割には形の良い細い足をしています。したがって太い足は珍しいらしく、「わたしの足はダメ、あんたの足はいい足だ」とほめたのです。まったくテレくさいことでした。

ホンダの赤いモーターサイクル…この島ではオートバイと日本語風に呼んでいましたが…これを疾走させるノーマイの姿はまさに女傑と呼ぶのにふさわしいものでした。

或る日、ノーマイは島回りをしようと、私をオートバイの後ろに乗せ、道が切れる島の端のローラというところまで走りました。環礁といっても島全体が地続きというわけではなく、潮が引いたときだけ姿を現す個所も多く、そこが行き止まりです。

途中、若者が椰子の実をナタで割り、積み上げている姿を数カ所で見かけました。ノーマイは、あれがコプラになるのだと教えてくれました。いぶし続ける必要上、火を絶やすことが出来ないので、夜も火の監視をします。仮眠用の小さな小屋がところどころに見られました。一人の体をかろうじて横たえられるだけの低い小屋です。かまどからは細い煙が立ち昇り、それが穏やかな貿易風に揺らいでいました。ノーマイのオートバイが若者たちの前を通るたびに、彼らはにこにこ手を振りました。

戦時中、母の故郷に疎開していたことがあります。ひなびた農村でした。夕餉の支度に粗朶を燃す煙が立ち昇り、そのにおいがただよい、急に空腹を覚えたことを思い出しました。コプラの煙と、粗朶を燃す煙が私の目の裏で重なりました。

道の切れたところでオートバイを止め、途中若者からもらった椰子の実に穴をあけ、ジュースを飲みました。無論、たつぷりとジュースのある若い椰子の実です。

ちょうど満潮の時刻で、環礁の内側と外側の潮が、水没している浅瀬ではげしくぶつかり合う情景を目にしました。海鳴り以外一切の雑音はなく、海の向こうを眺めているうちに、たった一人絶海の孤島に取り残されたような心細さを感じました。とにかく、この島は美しい。美しさのあまり、感動のあまり、声をあげて駆け出したいような、こうした二つの矛盾した気持ちにかられました。

私はフィールド・トリップに参加するチャンスには恵まれませんでしたが、もっと遠くの航海には2回参加しました。

マジュロで働き始めて1年後、1966年の夏、「MIECOクイーン」がフィージに行くことになりました。目的はドライドックです。本当は日本へ行った方が技術的にすぐれているのですが、資金の都合でフィージにしたものです。私はアマタに、ぜひ行かせてほしいと頼み、承諾を得ました。船員の一人として乗り組み、必要書類の作成、戻りに積み込む品物の買い入れなどに関するすべてのペーパーワークが私の仕事となりました。

船客も数人いました。彼らは遠く離れた小さな島から出稼ぎに来て成功した人たちで、久しぶりに帰るふるさとへのみやげを船に積み込みました。船客の希望の島に寄りながら、フィージへ行くことになりました。

フィージ行きが決まり、私ははしゃいでいましたが、米国人教員の数人が、救命ボートも救命具も充分にない船に乗るのは危険と警告してくれました。事故があっても、たとえ死亡しても何の保証もない旅など、米国人には考えられなかったのでしょうか。しかし私は日本を発ってマジュロに来た時も、命の安全は保証されませんでした。そして私は無事に到着したのです。安全が保証されないからといって、私の好奇心や冒険心がくじけるようなことはありませんでした。それならなおのこと、危険な船に乗ってみようではないかという気持ちがむらむらと湧き起こりました。

クルーと船客合わせて20人ほどを乗せて、7月はじめ、「MIECOクイーン」はマジュロを出港、先ずタラワに向かいました。乗り組んだクルーの中には、毎日オフィスで顔を合わせている商品買い付け係りのザキオスがいました。日本語の読み書きも出来、自分の名前は「咲吉」と、日本人学校で教わったと、手馴れた書体で書いて見せてくれました。夫人はハイスクール出のインテリです。オフィスの隣にあるコーヒーショップで夫妻とよくおしゃべりをしました。

マーシャル語を丁寧に教えてくれたのは咲吉でした。日本語、英語で書いた脇にマーシャル語のスペルと片かなの発音を書き添えてくれたので、私はそれを整理して簡易辞書を作り、わずかな間に簡単な会話が出来るようになりました。

咲吉は食事の時間以外、殆ど一日中デッキに立ち、海の彼方を眺めていました。四方に何もない水平線を見ているだけなのに、不思議と飽きることはありません。時々ドルフィンの群れが遠くで飛びはねながら移動して行き、咲吉はそれを指して「ドルフィンがツイストを踊っていますね」と笑いました。あの頃、ツ

イストというダンスがはやっていたのですね、加代さん。咲吉は詩人なのだと私は感じたものでした。

夜はデッキにゴザを敷き、仰向けに寝転んで、星空を眺めながら周囲の人たちといつまでもおしゃべりをしました。そしていつの間にか眠ってしまうという船旅でした。水平線に満月が姿を現す時の、その巨大さに驚いたのもこの船旅でした。

タラワに着いたときは夜でした。夜間に接岸するのは浅瀬に衝突する危険があるため、沖を流しながら夜明けを待ちました。明るくなると同時に、クルーの一人がマストの頂上に登り、浅いリーフの有無を監視しながら接岸しました。

岸壁では役人が待機しており、入国の手続きをしましたが、これは私の出番です。規定通りの書類を用意しておいたので、手続きは簡単に終わりました。

タラワではフィリップ・ワイルダーというビジネスマンの家にお世話になりました。フィリップの兄トムが、これからドライドック入りするフィージの会社の技師であることから、フィリップもフィージに同行することになっていたのです。

タラワで船員や船客の食料品・雑貨など必要なものを補給しました。その書類を作るために、フィリップのタイプライターを借りました。ここで面白い経験をしました。

小さな建物にデスクがあるだけというオフィスで、電気タイプライターを使っていた時、突然タイプライターが止まってしまいました。操作を誤ってこわしてしまったのかと、あわててフィリップを呼びましたが、「そんなことはマイナー・プロブレム」と平然としていました。暑さのため、すぐにタイプライターのモーターが加熱し、サーモスタットが働き、止まるのだと説明されました。そしてしばらく待って再び動き始め、仕事にかかることが出来ました。止まっている時間の方が長く、1枚の書類を作るのに1時間あまりかかるという始末でした。こうした経験は最初で最後でした。

その当時、タラワはギルバート・エリス諸島植民地と呼ばれていました。このタラワの暑さはマジュロとは比較になりません。マジュロは北緯8度ぐらいに位置しており、わずかながら夏・冬の差がありますが、赤道直下のギルバート諸島の暑さはそれを超えるものです。海の彼方の水平線は線ではなく、光の反射が強すぎるせいか、ぼんやりと空と海が溶け合っていました。

フィリップの家で2泊お世話になった後、同じギルバート諸島のフナフティに寄港しました。船客の一人の出身地です。彼はもちろん、船の全員が大歓迎されました。夜のうちに、島の人たちは浅瀬でフラッシュライトを照らし、光に寄ってくる魚を獲り、朝、塩焼きにして振舞ってくださいましたが、そのおいしかったこと。獲りたてですから。都会で食べる魚は獲りたてというわけにはゆかないせいか生臭いものでした。だから魚は生臭いものと決めていましたが、新鮮な魚は生臭くないと知りました。

ここで英国政府の地区行政官とその家族と知り合いになりました。まだ若い温厚な痩せた紳士でした。英国人は何故一様に痩せているのだろうかと思議な気がしました。横浜で生まれ育った私は、多くの外国人を見てきましたが、肥った英国人を見たことはありませんでした。小さな女の子が二人いました。現地人のサーバントにお茶の接待をさせるなど、貴族のような生活ぶりに見えましたが、給料は年間4千ドル程度ということでした。それなら私の収入とたいした変りはないではないかと、英国政府のつつましさを感じたものでした。

夜更けに船に戻りました。小さな島には岸壁がないので、船は沖に停泊し、小型ボートで数人づつが運ばれるのです。ボートの乗り降りはちょっと怖気づきましたが、すぐに馴れました。

出船の時、一人の男性船客は巨体を震わせ、声をあげて泣いていました。もしかして、生涯、再びふるさとに戻れないかもしれないのですから。今生の別れかもしれないのです。私も胸がいっぱいになりました。

ギルバート諸島はのちに独立してキリバスとなり、フナフティのある島々はツバルと名を変え、ギルバート諸島と分離して独立しました。私たちが訪れたのはその少し前でした。

フィージのスパに到着した時、久しぶりに都会を見て気持ちが浮き浮きしました。スパ・ポイントというところにあるフィリップの兄トムの家にお世話になることが決まっていたため、トムと、同じ会社で秘書をつとめるジーン夫人が港に出迎えに来ていました。私はトムの家のゲスト・ルームに、そしてフィリップは二人の子供の部屋に宿泊することになりました。

ドライドックの作業が終るまでの1ヵ月間、ここにお世話になったのですが、興奮の続いた毎日、毎晩でした。買い物、レストランでの食事、町の見物、映画館、博物館など。夜はすっかり顔なじみになったバーで、クルーたちと飲みまし

た。しかし咲吉だけは、宗教心が篤く、アルコールは一切飲まず、私たちの仲間には加わりませんでした。夜、一体何をしていたのでしょうか。そんなこと、考える余裕などありませんでした。

丁度寄港した日本の漁船から日本のレコードを数枚もらいましたが、その中には「すきやき」として知られている「上を向いて歩こう」、そして「炭坑節」がありました。「すきやき」はすでに外国でも親しまれていたもので、歌の好きなクルーたちはギターで曲を弾き、私が日本語の歌詞を教え、すぐに上手に歌えるようになりました。「炭坑節」は、昔、盆踊り大会で覚えた踊りを皆に教え、輪になって踊るなど大さわぎをしました。

バスを借り切って、クルーたち全員と島回りの一泊旅行もしました。途中、牧場に寄りましたが、マーシャル諸島には豚はいるものの、牛を見たことのない人が多く、こわごわと牛のそばに寄り、尻のあたりをなでてみたりしていました。新鮮な牛乳を飲んだのも初めてのようでした。

7、8月は南半球では冬の季節です。我々の感覚では、学校は当然夏休みのはずですが、フィージでは子供たちは毎日通学していました。クリスマスの頃が夏の盛りで夏休みになるということです。

商取引の相手、パキスタン人のナンベ氏の家には夕食の招待を受け、スバ郊外の彼の家に数人の仲間と訪れました。ナンベ氏の宗教では一夫多妻が許されているということで、招待されたのは第二夫人の家でした。それより先、ナンベ氏は、第二夫人の前で第一夫人に関する話題は絶対避けるよう注意されました。女性として、私はこれら夫人たちに同情しました。

夕食は普通の家庭料理でしたが、どれもカレーの辛味の強いものでした。それでも日常の味付けより弱いものにしたということでしたが、甘いもの好きのマーシャルの人たちには苦手のようなようでした。

トムの家にはワティというメイドがいました。若い、フィージの原住民族で、私が滞在した1ヵ月間、大きな体をマメに動かし、一日も休むことなく働いていました。賃金はたいそう安いと聞いていました。私は別れに際し、心ばかりのお礼にと、20ドルを手渡しました。1ヵ月のお世話に対してはわずかとはい었지만、しかし彼女は大金だと言って大喜びでした。

私が海外に出た目的の一つは金を蓄えることでした。ですからフィージではあまり買い物をしませんでした。しかし、クルーたちは、陸上に滞在する間に限

り、1日10ドルの日当を支給されたので、お小遣いは足りていました。私は郵便局に立ち寄り、数種類の切手を買いました。切手のコレクションの趣味があったわけではありませんが、ほかに私の買えそうなものは思い当たらなかったのです。

英国の植民地フィージは、間もなく独立することになっていたので、町全体、特にフィージ原住民族の間には活気があふれていました。彼らは非常に誇り高い民族と見受けられました。口論の最中、「フィージアンとしてのプライドにかけて」などと大声をあげている場面を何回か目撃しました。支配者による圧政が怒りや不満となって蓄積され、彼らが誇りを維持することはその反動ではないかと私なりに考えました。

植民地時代のフィージの郵便切手。多分、今では貴重なコレクションになっているかもしれません。

第5章 船・・・慰霊の旅

翌年の夏、日本から慰霊を目的とした二人がマジュロを訪れました。「マーシャル・ギルバート方面遺族会」という団体の代表です。旧南洋群島やギルバート諸島で戦死した日本軍人の慰霊と遺骨収集のためにミクロネシアの島々を回るという大きな任務を負っていました。

サイパン、ポナペなどを訪れ、更にマーシャル諸島へとやって来たものです。マーシャルではクェゼリン、ルオット、ロイ・ナムールなどの島や海上で激戦があり、多くの戦死者が出ましたが、生憎クェゼリン環礁は米軍のミサイル発射基地で、部外者、特に外国人の立ち入りは許されていません。団体の代表、浮田信家元海軍大佐と、新婚6ヵ月で夫をルオットで亡くした学校養護員の佐竹エスさんはクェゼリンでの慰霊をあきらめ、マジュロをハブとして、ギルバート方面に行く計画を進めていました。

「パシフィック・アイランダー」という、日本とミクロネシアを往復している貨物船で、二人が到着した時、アマタと共に私も出迎えました。浮田さんはすでに72歳でしたが、背筋をぴんとのぼし、大またに闊歩する、いかにも旧海軍の高官らしい威厳がありました。佐竹さんはまだ40代の働き盛り。重い任務を感じているせいか、緊張しているようでした。

船に積んだ荷物はぼう大なもので、それぞれの島に立てる木製の慰霊碑、お供え物、酒など。それに、奥地でも生活に困らないようにと、生活必需品があふれていました。この二人と行動を共にしてお世話をするようにと、私はアマタに命じられていたため、ホテルに落ち着いたあと、早速旅の計画を話し合いました。この旅のために、かなり前からリサーチを続けていたらしく、浮田さんは詳細な地図、海図、記録などの写しを用意しており、私は戦時中の島々の様子を聞かせて頂きました。

MIECOの所有する貨物船でマーシャルの島々をはじめ、タラワ、マキン、オーシャン、ナウルなどを回りたいということでした。マキン・タラワの激戦、玉砕という悲報は、まだ女学生だった私もよく記憶しています。しかし、マキンというのは本当は「リトル・マキン」のことで、激戦があったのは、その近くの「ブタリタリ」という島であることを初めて知りました。

「ラリク・ラタク」がナウルに商品買い付けに行くことになりました。この時、浮田さんたちは、マーシャル諸島のヤルートに滞在していましたが、船がナウルに行くことを知り、この便を逃がしたら再びチャンスはないと判断し、ヤルートからマジロのカトリック教会にあるラジオを通じて連絡してきました。ヤルートに寄港して、自分たちをピックアップしてほしいとの要請でした。このラジオの応答は私が手伝ったのですが、たいそう聞き取りにくく苦労しました。

浮田さんたちの希望で、先ずタラワに、そして、マキン、オーシャンと寄港し、ナウルに向かいました。

MIECOのクルーとしては、マネージャーのチャーリー、その夫人、そのほか前回と殆ど同じ顔ぶれでした。

タラワに到着した時、すっかり親しくなったフィリップ夫妻が出迎えの人ごみの中にいたのがすぐにわかりました。日本人戦死者の慰霊を兼ねた訪問であることは、政府係官らに事前に伝えてあったので、浮田さんたちの荷物は検査を受けることもなく、政府の車に積み込まれ、慰霊現場まで運ぶなど、非常に親切な対応でした。

浮田さんは、難関といわれていた旧海軍兵学校出身なので、さぞかし英語が堪能かと思っていましたが、「あの当時は、体さえ頑丈なら誰でも海兵に入れたものです。私は英語は全然・・・」と言って私に頼りきりでした。

佐竹さんは用意した黒の礼服に着換え、浮田さんも白シャツに黒ズボンといった服装で、先ず、用意のシャベルで穴を掘り、木碑を建て、供物を並べ、酒をかけ、弔辞を読み上げました。島の政府係官や、一般住民も参加して、おごそかな慰霊祭でした。美しい平和な島と、血みどろな死体の山のイメージはどうしても重なってきません。何故戦争が・・・そして何故多くの人が、国家のためという偽りの大義名分でかりだされ、命を落としたのか、理解できませんでした。

浮田さんたちは船に戻り、私とほかに数人のクルーはフィリップの家に宿泊しました。夜更けまでにぎやかに思い出話しに花を咲かせ、翌朝は少々寝不足でした。

タラワを発ったあと、「マキン」として知られているブタリタリに到着しました。ここは全くの未開の島で、服装は下半身に布を巻いただけ。女性も胸を露出していました。住居といえば、柱と屋根、高い板張りの床。周囲を囲う壁もなく、家ともいえない粗末なもので、道路も舗装されていないという状態でした。浮田さんは持参した地図や記録を調べ、場所を確かめ、木碑を建て、タラワと同様の慰霊祭を執り行いました。このような、未開の絶海の孤島にまで日本軍が侵攻して、悲惨な、無念の死を遂げたなど、想像するのが困難でした。

オーシャンに到着しました。オーシャンとナウルは燐鉱石が豊かな島で、その採掘のため昔から多くの中国人が雇われていたようです。オーシャンには、燐鉱石の会社の役員夫妻が住む立派な住宅がありました。そこで私たちは慰霊祭のあと、夫妻から昼食の招待を受けました。殆どが缶詰めと冷凍食品を調理したものでしたが、ダイニングルームのテーブルで食べたその気分、そして料理の味は最高でした。まるで王家の賓客になったようなと言ったら大げさでしょうか。

食事のあと、係員が車で島の端にある墓地に案内して下さいました。これらはかなり昔の中国人労働者の墓らしく、墓碑銘がすべて漢字であったため、日本人のものかもしれないと思い案内して下さいました。

日本軍人の墓地や墓標などあるはずないですよ、そうでしょう。激戦で散乱したしかばねを誰が葬ってくれたというのですか。だからこそ浮田さんと佐竹さんが、わざわざ慰霊碑を立て、遺骨収集に訪れたのです。浮田さんの話では、日本の軍人の殆どは、食糧の補給を絶たれたため、餓死したのだということです。

ナウルは最後の訪問地です。ナウルもオーシャンも環礁ではなく、隆起した珊瑚礁、つまり岩礁です。赤道直下にぽつんと出来た小さな島で、英、ニュージー

ランド、オーストラリア3カ国の信託統治領ですが、戦時中は日本の占領下にありました。

海を飛ぶ鳥は海中に排泄せず、陸地に落とすということです。その排泄物が何百年にもわたり堆積し、乾いて燐鉱石になり、これが良質の肥料として利用されています。オーストラリアなどが数十年間の契約を結び、大がかりな掘削がいたるところで続けられていました。そのため、島中が白っぽいほこりに覆われていて、家の中の家具など、すべて、うっすらとほこりをかぶっていました。

ナウルはのちに独立して共和国となりましたが、私たちが訪れたのは、そのわずか半年前でした。

ナウルに到着した時、出迎えの中にいた警察署長が、浮田さん、佐竹さんそして私を車に乗せ、島を一周して見物させてくださいました。肥った恐ろしい顔をしたこの警察署長は人なつこい笑顔を見せ、「小さな島です。一周するのに20分しかかかりません」と説明しました。

私とチャーリー夫妻は、独立後初代大統領になったハマー・デ・ロベルト氏の家に宿泊しました。デ・ロベルト夫人の父親とチャーリーとが親戚関係にあるということです。一家はちょうど、休暇でオーストラリアに旅行中。夫人の父親一人が留守番をしていました。私は娘さんの部屋に、チャーリー夫妻はデ・ロベルト氏がオフィスに使用している別棟に宿泊しました。

ここではMIECOの商用が控えていたため、私はチャーリーと共に多忙で、浮田さんたちの慰霊の手伝いは出来ませんでした。二人とも、すっかりクルーや島の人たちと親しくなり、言葉も結構通じて、私の手伝いは必要としないようでした。そしてナウルに滞在した10日間、友人も出来て楽しんでいた様子でした。

ナウルにはチャイナタウンがあり、大きなモールに中華飲食店が密集していました。私たちは毎日中華料理をむさぼり食べました。その周辺には中国製家具や工芸品を売る店も並んでいました。素晴らしい木彫りの小箱や大型トランクなど、どれもほしくなるものばかりでした。しかし、私はそれらを横目でにらんだまま通りすぎました。そしてここでも郵便局へ行き切手を買いました。

ナウルは物価の安いことで知られています。マジュロを発つ前、私はダニー秋本の後任として着任したボブ・ロウ地区行政官から、スコッチ・ウイスキーを2ケース買うよう頼まれました。しかし買い手が殺到し、1ケースしか買うことが出来ませんでした。

ナウルは世界最小、そして世界で最も金持ちの島といわれていました。燐鉱石採掘の契約と引き換えに、ナウルには大金が入ります。島の人たちの住宅、生活費などすべて政府がまかなっているということで、そのため働く必要はなく、働いているのは殆ど他の島から出稼ぎに来た人たちでした。

豊かな燐鉱石は20年間掘り続けることが出来るということでしたが、さて、20年経ったらどうなるのでしょうか。

かなりあとのことですが、ナウルの燐鉱石が掘りつくされたあと、島中が穴だらけになり、大きなダメージを受けたとして、訴訟問題となったということが世界のニュースにも取り上げられました。そんなことははじめからわかっていた筈でしょう。

燐鉱石が掘りつくされたあとも、入った大金を投資し、その利益で島の人たちは安楽に暮らせることが予想されていました。しかし、その投資が失敗に終わったということで、ナウルの豊かな時代は過去のものとなりました。

航海中は船尾に擬餌を付けた釣り糸を常に取り付けていました。時折、愚かな魚がかかりました。そんな時「サシミが獲れた！」と大騒ぎです。夕食には炊きたてのご飯とさしみといった豪華版になりましたが、さしみの切り方は不細工で、しかも、わさびもなく、醤油に唐辛子を混ぜて、それでもおいしく頂きました。

ナウルから再びタラワに寄港し、マジュロに到着した際、ボブが真っ先に駆けつけました。無論、地区行政官としての公務ではありますが、先ず私のところへ来たのは、やはりウイスキーが目当てでした。1ケースしか買えなかったと弁明しましたが、とても嬉しそうでした。ボブはよほど酒好きのようです。

浮田さんと佐竹さんは「パシフィック・アイランダー」が戻ってくるまでの数週間マジュロに滞在し、収集した遺骨を茶毘にふし、用意の箱に収めるなど、悲しい、しかし重要な作業を続けました。そしてそのあとは、私たちとピクニックやパーティーなどを楽しみました。別れに当たり、日本での再開を約束しました。

こうして、慰霊の旅は無事に終わりました。

ミクロネシアには日本のまぐろ漁船が操業していますが、急病人やけが人が出た際、最寄の島に緊急寄港します。

あるとき、盲腸炎の漁師が漁船から降ろされ、病院で手術を受けました。手術後の回復は順調で、漁船が迎えに来るまでしばらく滞在して島の生活を楽しみました。19歳という、まだ少年の面影のあるこの漁師は、ビーチで下穿きひとつになり海に入り、いつまでも水しぶきを上げ、暴れながら思い切り叫び続けていました。夕日が落ちてそろそろ引き上げようという時、彼は日本へ帰りたくなくなったと、少々感傷的になっていました。こんなにのびのびと暴れまわったことはなかったのかもしれませんが。その可愛らしい幼さの残った表情が忘れられません。この漁船は北海道の紋別からのもので、冬季だけ、南洋の漁場で稼ぐのだということです。

忘れられないけが人がもうひとりいます。鹿児島島の漁船から降ろされた20歳の漁師は、足のけがが化膿して非常に危険な状態で、膝から下の切断手術を受けました。日本を離れ、知る人のいない遠い小さな島での大手術は、彼にとって人生最大の災難であったでしょう。手術の間、私についていてほしいと彼は私に懇願しました。そのすぎるような目に、私の心は痛みましたが、手術の現場に立ち会う度胸が私にはなく、終り次第また来るからと、彼の手を握り力づけました。

手術のあと、彼はすっかりあきらめたような、虚脱状態で、見るにしのびないものでした。数日後、看護婦ひとりが付き添い、飛行機で帰国することになり、私も空港にかけつけました。ストレッチャーでDC4の機内に運ばれましたが、ゆかたを着た彼の足もとに思わず目を向けました。ゆかたの裾からは片方の足首しか出ておらず、彼は失った片足をかくすように、いたわるように、手を添えていました。彼に何と慰めを言ったか覚えていません。彼は寂しげな微笑を私に向け、機内に消えました。

数十年経った今も、彼のあの微笑を思い出します。義足をつけたらどうか、車椅子だろうか、結婚したらどうかなど、さまざまに思いをめぐらせます。

第6章 女性上位

大酋長であり、MIECOの社長であり、後にマーシャル諸島共和国の初代大統領となったアマタ・カブアの3人の子供のうち、ひとり息子はまだ小学生のかわいい坊やでした。アマタはその子を連れて、よくレストランで食事をしていました。ある時、坊やの頭をなでながら、「この子は次のチーフにはなれないので

す」と、寂しそうにつぶやきました。私はその事情を知っていましたので、「残念ですね」としか言えませんでした。

事情というのは、マーシャルばかりでなく、ミクロネシア全体かもしれませんが、酋長の地位は男子が継承するものではあっても、酋長の子息ではないのです。なぜなら、酋長の妻が産んだ子供の父親が夫であるという証拠はないのですから。科学的調査など考えもおよばなかった遠い昔の話です。もし酋長の血を引いていなかったら、血筋が絶えてしまうではありませんか。したがって、現酋長の姉妹の産んだ男子が次期酋長になります。母親の血筋さえ確かであれば、父親が誰であろうと、血は絶えることはないのですから。アマタの前の酋長は、だからアマタの伯父または叔父であるはずです。

アマタの坊やは後にマーシャル諸島共和国の駐日大使になりました。

昔からどこの国の若者も、より良い生活を夢見て遠い地への旅立ちに憧れています。私もそうでした。小さな島に住む人たちはなおさらのことだったでしょう。しかしカヌーを漕いで広い海に出ることは命がけの冒険でした。当然、殆どが屈強の男子だったことは容易に想像できます。時には逞ましい女性も仲間に加わりましたが、それは非常にまれなことでした。

無事に目指す新天地にたどり着き、新しい生活を始めてみると、若者たちの間にはセックスの処理の問題が生じます。数少ない女性が大勢の男性を交互に相手にすることが必要となったのです。そのため、女性の男性関係は問わないものの、男性が女性関係を乱用することは習慣上許されないことでした。そうした意識が現在でも続いており、子供たちに「母親は誰か」と訊くことは出来ても、「父親は誰か」と訊くことはタブーとされているということです。それほどセックスは乱れていた…というより、多くの男性と交わるのは通常のことになっていたようです。一般庶民であるならば、血筋をとやかく論じる必要はないでしょうが、酋長となれば重大問題です。妻の産んだ子供の父親は問わない代りに、その長男を次期酋長とすることは認められないというわけです。

こうしたことは、島の長老から聞いた話です。血を絶やさないために、大勢の側室を囲って子供を産ませていた徳川将軍家の非人間的な習慣を連想しましたが、マーシャルの習慣の方がはるかに合理的で人間的なものと感じました。

マーシャルでは女性が常に上位にあり、男性はそれにしがっているようです。

アマタでさえ、夫人の強さに一步譲っている様子が普段の生活の中で見受けられました。自分の息子が酋長になれないとアマタが私に話した時、私はこうした事情をすでに知っていたのでした。

セックスが乱れていれば、知らないうちに近親結婚が続き、奇形の子供が生まれることになってしまいますが、その子たちは一体どうしているのでしょうか。

島にやってきた宗教家や開教使たちは雑婚をいましめ、正しい結婚をするよう説教を続けていますが、昔からの事情や習慣を知らない悲しさ、あまり役立つ説教ではなかったようです。

マジュロの隣りにアーノ（またはアルノ）という島があります。隣りといっても、晴れた日に、はるか遠く、けし粒ほどに見える島で、船で行けば一昼夜かかります。その島のランガという部落にある花嫁学校が有名で、米国の或る雑誌社が取材に来たことがあります。この花嫁学校は夜更けに、椰子の木の下で、そのものズバリのセックスを教えるのだということです。

日本の古い歌、「わたしのラバさん」という歌詞で始まる「酋長の娘」の中で「椰子の木かげでテクテク踊る」と歌われていますが、この歌は、もしかしてアーノの花嫁学校を歌ったものではないかと、勝手に想像しました。因みに「色は黒いが南洋じゃ美人」は、法廷判事、カブア氏の姉がモデルということで、この歌をカブア判事の前で歌うとイヤな顔をするそうです。色は黒いより白い方がいいのでしょうか、写真を撮る時、露出を多くして色白に撮ると喜ばれます。

この花嫁学校は女性のみで、男性の入域は禁じられているということです。米国からの雑誌取材班は男性ばかりであったため、取材が不可能となりました。もし許されていたら、MIECOの船をチャーターするところでしたが、我が社も商売のチャンスを失ったわけです。

私はこの花嫁学校に興味を持ち、ぜひ行ってみたいと思いました。しかし船の航行は不定期、しかも私は雇われて働いている身で、勝手に仕事を休むことは許されません。結局あきらめました。

聞くところによると、月の明るいビーチで、教師がマジックを教えるのだということです。つまり、ロマンチックなムードを作り、催眠効果をねらったものではないかと私は想像しました。この花嫁学校を卒業した女性を妻にすると、夫婦仲は非常にうまく行くと言い伝えられています。ですから、夫婦仲の良いカップ

ルを見ると、「奥さんはきっとアーノの出身だろう」とかげ口をきく人もいました。俗に「トラック男にマーシャル女」と言われています。

女性上位といえば、マジュロの女性はあまり働かず、日中、ゴザと枕を抱えて歩き、適当な木陰を見つけてはゴザを広げて、「大」の字になり昼寝をむさぼっている姿をよく見かけました。夫の方は仕事から帰宅すると、食事の用意をしたり、子供たちに水浴びをさせ、着換えをさせるなど、まめまめしく家事に励みます。

食事といえばご飯の炊き方は、日本人の習慣から見れば、ずい分変わった方法です。成熟した椰子の実の内側を削り、米に混ぜ、更に砂糖を入れて下ごしらえをします。穴を掘り、集めた小枝を燃して消し炭を作り、その上に米の鍋を置きっ放しにするというものです。かなりの時間が経った頃、適度に炊き上がるというわけですが、ココナッツ入りの甘いご飯は私の口には合いませんでした。

マジュロの人たちは甘いものが非常に好きで、昔は外国人が持ち込む砂糖と、精巧な手芸品を交換したということです。何にでも砂糖を大量に使うせいか、肥満と糖尿病の悩みが続いています。糖尿病が悪化して、両足を切断し、車椅子で生活する人を何人か見かけました。

南の島、夢の島といって憧れるミクロネシアも多くの問題を抱え、その対処が遅れているという現実をまのあたりにしました。

とはいえ、私はミクロネシアの生活がたいそう気に入って、充実した日々を過ごしました。何が一番気に入ったかといえば、島の人たちの暖かさ、邪気のない単純さです。日本を離れて以来、一度も不愉快な思いをしたことはありませんでした。人にいじめられたり、いやがらせにあったり・・・そんなことは遠い昔の小さな悪夢になってしまいました。

第7章 冒険？

クェゼリンの米軍ミサイル発射基地で働くハワイの日系二世と縁を得て結婚し、私の3年間にわたる冒険は突然終わりました。え、冒険？生まれて初めて日本を出て、3年間の絶海の孤島での暮しを私は勝手に冒険と決めて力んでいました。これはずい分滑稽なことですね。多くの人の善意に支えられ、ぬくぬくと楽園での心地良さを満喫していただけではありませんか。いわば3年間のバケーションだったのです。誰もこれを冒険などとは思っていないでしょう。これら善

意の人たちは、私の青春を充実させてくれました。若さのすべてを吐き出したのではなく、この人たちが、若いエネルギーを私に注ぎこんでくれたのです。

結婚して間もなくハワイに移りましたが、若いエネルギーを吸収することも発散することもなく、平凡なものでした。交際は夫の同僚、友人やその夫人たち、夫の親戚ばかりで、私自身が選んだ友人ではなく、ただニコニコと挨拶して、いい奥さん、優しい奥さんと、良い評判を得るための演技をすることに専念しました。「平凡だけどしあわせ」と言ったあなたの言葉を何かにつけて思い出しました。確かに平凡でしたが、果たしてこれがしあわせなのだろうか・・・ただ不幸でないだけだと私は心の中で反発していました。

しかし夫の死後、私は自分の傲慢さに気づきました。何事も起こらず、平穩無事に暮らせることほど幸福な人生はないのだということを知りました。しかもこれはすべて夫の庇護があったからこそのことでした。

加代さん、すでにお孫さんたちにかこまれ、優しいおばあちゃまとなったあなたとは違い、私は子供に恵まれず、たった一人ですっとハワイに住んでいます。日本からの観光客は、ハワイを南のパラダイスと称賛し、青い空と海の美しさに歓声を上げています。たしかに美しいかもしれませんが、マジュロの美しさとは比較になりません。ハワイの人たちの心の暖かさをアロハの精神と称えています。でも、マジュロの人たちの心の方がはるかに暖かく、けがれなく、広いものだ、私はハワイのよさが話題になる度に、マジュロはもっともっと良いのだと、判官びいきで依怙地になっています。

時は移り、マーシャル諸島共和国となり、新しい政府が確立し、外交活動も活発になっているようです。私のひいきの根拠はもう失われたかもしれません。新政府の重要な役職に、当時私と一緒にオフィスで働いていた若者の名前も見受けられます。しかし、これは世界の中の1カ国として、外に向けた顔であり、少なくともマーシャルの内部ではアマタのような大酋長がいまだに厳存し、島々の秩序を守る要（かなめ）であってほしいと私は願っています。アマタは初代大統領となりましたが、私の夫が逝った同じ年に他界しました。これは日本からの遺族会の会報で知ったことです。

アマタと日本の小坂さん、この二人が私の人生を大きく変えてくれた恩人です。

私にマジュロ就職のチャンスを作って下さった小坂博康さんは、戦時中、日本陸軍の特攻隊「隼」のパイロットでした。8月16日に出撃の予定でしたが、15日に終戦となり、命拾いをしたという数奇な運命の人です。2014年5月現在、小坂さんは横浜で健在です。

私は高齢ではありますが、老人ではありません。再びマジュロを訪れるチャンスがあれば、自称「冒険」とやらをくり返してみたいと思っています。変ってしまったであろう島のどこかで、私の若さの名残りを拾うことが出来るでしょうか。

終